



■令和二年二月七日

■開山忌

■善光寺留学僧

育英会辞令交付式

善光寺開山忌並びに第三十三回育英会辞令交付式が令和二年二月七日、午後二時より、釈迦殿で執り行われ、関係のご寺院、総代はじめ檀信徒の方々が多数参列されました。

開山忌法要は、焼香師に西有寺専門僧堂堂長・小田原成願寺住職山口晴通老師をお迎えして営まれ、開山棟庵白純大和尚、二世中興大圓武志大和尚のご遺徳を偲んで参列者一同が焼香し追善の誠を捧げました。



左より久松師、住職、余氏、陳氏

続いて育英会辞令交付式は黒田博志理事長の導師により行われました。

今年度育英生に採用されたのは久松彰彦師（曹洞宗総合研究センター教化研修部門研修生）、中国出身の余新星氏（東京大学大学院博士課程）、台湾出身の陳怡安氏（駒澤大学大学院博士課程）の三名。

久松師はアメリカ、余氏と陳氏はそれぞれ東京大学と駒沢大学にて仏教学研究に励まれます。

開山忌焼香師をお務め頂いた山口晴通老師は「先代さまから現任方丈さまが継がれている尊い育英会。その志を育英生に選ばれた皆さまはお心に刻み込んで頑張って頂きたい」と述べ、留学僧の活躍を祈念されました。

（55ページに続く）





(中グラフからの続き)

辞令交付に先立ち駒沢女子大学学長安藤嘉則
老師より選考過程報告が行われ「一カ寺でこれ
ほどの留学僧を送り出している寺院は他にはあ
りません。今回も学識と意欲ある新たな育英生
を迎えることができました」と述べられました。

黒田理事長からこの育英会は、先代住職が若
い頃に海外で得た仏縁が人間形成の土台になっ
たとの思いから善光寺開創十五周年を機に仏教
の振興、世界平和に寄与できる人材育成を目的
に創設した報恩行であること。そして、その原
資が檀信徒からの毎食一口の食事を減らして捻
出した寄付であることなどを紹介し、最後に「多
くの檀信徒や和尚さま方がこの育英会に力を注
いでくださっております。その思いをくみ取っ
ていただき、研鑽をしていただきたい。私も共
に精進して参りますので一緒に精進しましょう」と
と祝辞を述べられました。



久松師は大本山永平寺での修行時代に外国人参禅者を案内した際、アメリカで禅を広めた鈴木俊隆老師の著作を読み啓発され、今後は鈴木老師が設立したサンフランシスコ禅センターなどで修行を続けられます。

余氏は北京の清華大学大学院を卒業後、日本の大手自動車メーカーでの勤務を経て、現在は東京大学大学院で夢窓疎石など中世の禅僧や親鸞聖人の研究を続けています。

陳氏は、国際仏教学大学院大学で『華嚴経』の研究を行っており、今後は駒澤大学大学院博士課程で研究を続けられます。

懇親の席では、昨年度育英生の浅摩泰真師が米国タサハラ禅マウンテンセンターでの修行を終えての帰国報告を行いました。

三ヶ月の秋安居で三十五人の在家者や出家得度者と一緒に修行。坐禅三昧の日々を送り、「米

国の方々は熱心で、日常生活に仏教を生かし、
仏教を楽しんでいる人が多かった。雑談の時も
仏教の話ばかりで充実した修行生活が送れまし
た」と感謝の報告。

また、新型コロナウイルスが流行の兆しを見
せ始める中、中国武漢出身の余氏は「日本では
あまり報道されていませんが、日本政府が在留
邦人帰国の為に中国武漢にチャーター機を派遣
した際、救援物資を中国に寄付してくれていま
す。武漢と姉妹都市の大分市もマスクや防護服、
衣料品を送ってくれました」と感謝の言葉を述
べられました。

そしてその救援物資に「山川異域 風月同天」
の文字が貼られ、それを知った中国の人々が感
動しているというエピソードを披露しました。

この文字は奈良時代長屋王が鑑真和上を日本に
招請するため、千枚の袈裟を送り、その袈裟に

刺繍されていた漢詩

山川異域 風月同天

寄諸仏子 共結来縁

の一部。鑑真和上はこの漢詩に感銘を受け日本
行きを決断したと伝えられる。

余氏は「日本が全力で援助して下さっている
ことに中国の人々は本当に感謝しています。政
治的な問題は別として民間のレベルではとても
親しく交流がなされています。私も仏教徒とし
てこの育英会をはじめ日本で学んだ素晴らしい
事を今後中国に戻った時にもまわりの人に伝え
ていきたい」と語られました。